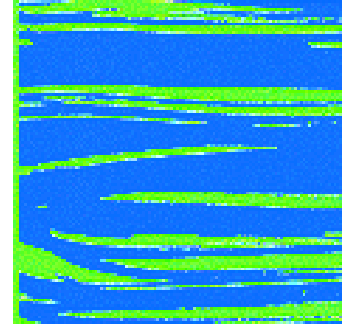


日本行動分析学会ニューズレター J-ABA ニュース



2008年 冬号 No. 53 (2009年2月20日 発行)

発行: 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学文学部心理学研究室内

FAX: 075-465-7882 (日本行動分析学会事務局と明記)

URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

退任のご挨拶	藤 健一
今期委員会活動報告	
機関誌編集委員会	真邊一近
研究教育推進委員会	浅野俊夫・島宗 理
倫理委員会	中島定彦
広報委員会	望月 要
自主公開講座報告: 「特別支援教育を推進する連携と協働に向けて、行動コンサル テーションから学ぶ」	平澤紀子
日本在住学生会員の ABA/SQAB 参加に対する助成事業	杉山尚子
理事選挙報告	浅野俊夫
自著を語る 『インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす』	青木愛弓
自著を語る 『臨床行動分析の ABC』	武藤 崇
『行動分析学が学べる日本の大学・研究機関』情報提供のお願い	望月 要
編集後記	ニューズレター編集部

退任のご挨拶 理事長 藤 健一

立春を過ぎてから、急に春めいてまいりました。会員の皆様も年度末の慌ただしいひとときを如何お過ごしでしょうか。

さて、現理事会の任期(2006.4-2009.3)もあと一月余りとなりました。小生が理事長に就任してから早くも3年が経ってしまいました。今期の理事会の3年間の総括につきましては、最後の常任理事会が3月14日に開催される予定

ですので、これを待ちたいと思います。いずれ、ニューズレターにおいてご報告する機会があると思いますが、現時点でのまとめを理事長として会員の皆様にお示しするとともに、退任のご挨拶を一言申し上げます。

小生は理事長として、2006年度~2008年度理事会の目標を三つ掲げました。一つめは、行動分析学会の学術研究の一層の活性化と連携の追

究でした。二つめは、学会および日本の行動分析学の学問的・学術的蓄積の利用環境の整備でした。最後の三つめとして、学会運営および会員へのサービスのあり方の検討を掲げました。

会員の皆様方をはじめとして、各理事、常任理事、学会事務局の3年間にわたるご努力とご尽力とにより、次のようにその成果をまとめることができるかと思えます。

まず、一つめの課題については、「行動分析学研究」の定期刊行の回復を3年間かけて実現を致しました。さらに、学会の出版計画では、「研究倫理」に関する出版企画が約2年間の検討を経て、ほぼ実現の運びとなりました。また、関連学会との連携事業としては、2007年立教大学での年次大会における「動物実験における倫理問題」研修会（動心会員、基礎心会員、動物行動学会員も無料参加可とした）や、横浜での年次大会から開催された「教育セッション」（学校心理士更新ポイントとなる）を実施するようになりました。

二つめの課題については、「行動分析学研究」や大会発表論文集の利用環境の再整備についてはいくつかのプランは検討されましたが実行には移されませんでした。ただし、最近の新入会員の増加状況に鑑みて、「行動分析学研究」のバックナンバーを廉価で手軽に発注できる期限付きの企画を実施しました。その結果、予想以上の注文をいただきました。このことは、同時に学会の財政に寄与するという点においても、大きな貢献となりました。

三つめの課題については、これが今期理事会において具体的に最も具体的に進展したものと考えています。学会事務局の一部の業務の外部委託化については、すでに前理事会（中野理事長）から検討を行なっておりましたが、複数の

業者への聞き取り調査や常任理事会などでの約2年間にわたる検討を経て、具体化の第一歩を將に踏み出そうとしているところです。学会事務局の業務の一部委託化は、特に判断を要しない定型業務と、検討・判断の必要な作業とを分離することを容易にします。このことは、学会内外から絶え間なく到来する種々の課題や問題を、学会事務局の段階で確実に効率よく分類・整理・把握・検討し、常任理事会、理事会、総会に提案し、承認された課題については再び理事会、事務局のレベルにおいて実行するという過程を、より明確に実行者に認識させる利点があると考えられます。

近年、学会事務局業務量は、年々増大しています。このことは、学会事務局の移転引き継ぎといった節目を迎えたとき、実にはっきりと現れてきます。学会員数の増加、学会規模の拡大、学会企画の多様化などなど、そのどれもが学会事務の作業量の増大と深くかかわっており、このままでは自重と積載量とが共に過大となって離陸できなくなった飛行機になってしまう危険性のあることを、決して低く見積もってはならないと思えます。

もちろん、この学会事務局業務の一部外部委託については、のちの効果の確認が欠かせませんが、現今の行動分析学会の事務量の増加率を考えますと、これを実施してみる価値はあると判断を致しました。

今期理事会の仕残した課題は大小多々あるほかに、新しい課題も出て参りましょう。こういった数多の課題と感慨とが脳裏に去来する昨今、小生は今期理事会を代表致しまして、この3年間の学会活動を支えて下さった会員の皆様に、心からお礼を申し上げたいと思えます。有り難うございました。

今期委員会活動報告
機関誌編集委員会

担当常任理事 真邊一近

編集委員長を連続2期努めさせて頂きました。1期目は、年2号の出版スケジュールを軌道に乗せることを第一の行動目標に掲げましたが、残念ながら達成できず、第2期目に持ち越してしまいました。幸いなことに、2期目の今期は、特集号の出版を含めこれまでの出版の遅れを取り戻すことが出来ました。ご投稿頂いた学会員の皆様、並びにアクションエディターを努めて頂いた先生方に、厚くお礼を申し上げます。

今期の終盤は、投稿論文数が急激に増加し、編集委員、ゲストレビューアの先生方に何度も査読をお願いすることになり、うれしい悲鳴を上げている状態です。この理由としては、以下の2点が考えられるかも知れません。一つめは、新たな論文形式として「研究報告 (Research Reports)」を設けた点、2点目は、順調に学会誌が出版されるようになり、投稿対象誌としての優先順位が高まった可能性です。この2点は、2期目の編集計画が功を奏したものと考えています。現在、23巻の1号と2号の出版作業を行っている最中ですが、24巻の最終受理論文数も順

調に増加しつつあり、来期の出版にはなりません。年度の早期に出版可能な見通しです。

本年4月以降は新たな編集委員会による編集がスタートしますが、それまでにご投稿いただいた論文は、新編集委員会と相談の上、現編集委員会が責任を持って査読等の編集作業を行う予定です。今後も皆様の積極的なご投稿をお待ちしています。これまでの皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

(投稿を予定されている会員の皆様へのお願い)

E-mailで電子ファイル(TextファイルあるいはWordファイル)を添付ファイルとしてお送りください。もし難しい場合は、従来通り印刷した原稿をお送りください。編集部で電子化します。投稿に際しては、投稿規定に掲載している書式をお守りください。行動分析学研究は、APAスタイルに準拠しています。例えば、雑誌の巻数字は、ボールドではなく、イタリックになります。事前にご確認の上、ご投稿頂ければ幸いです。E-mail address: manabe@gssc.nihon-u.ac.jp

研究教育推進委員会

担当常任理事 浅野俊夫・島宗 理

三年間で公募型の自主公開講座を11件支援しました。年次大会では「基礎と応用の連携」、「行動分析学のエビデンス」に関するシンポジウムを企画しました。後者については、平澤先生はじめ皆さまのご協力により、機関誌に特集号としてまとめることができました。横浜国立大学で開催された年次大会では「教育セッション」を学校心理士の継続ポイント対象講座として会員・非会員の方々に受講していただけるよう申請しました。web上に、会員数や機関誌に掲載された論文数、会費納入率など、学会のパフォー

ムに関する指標をアーカイブ化し、行動分析学の卒論・修論を登録・閲覧できるデータベースを設置しました。学会賞に関しては論文賞の規定変更を行い、第4回論文賞の選考を行いました。実践賞については、第4回から6回までの選考を担当しました(第6回は現在選考中です)。もう一つ「他学会との連携」もテーマにあげていましたが、これについては大きな進展をつくりだすことができませんでした。次期常任理事会への期待として引き継ぎたいと思います。

倫理委員会

担当常任理事 中島定彦

倫理委員会は、会員の諸活動の倫理的公正さを維持するための活動を行う目的で設けられている常置委員会です。今期（2006～2008年度）の倫理委員会は、中島（委員長、関西学院大学）、鎌倉やよい（愛知県立看護大学）、森山哲美（常磐大学）、大河内浩人（大阪教育大学）、大石幸二（立教大学）の5名でした。なお、中島が2007年度に研究留学をしましたので、その間は鎌倉委員が委員長業務を代行しました。

倫理委員会は、以下の活動を行うことになっています。すなわち、(1) 倫理綱領の審議、(2) 会員からの提訴について調査し、倫理綱領に照らして適正か否かを審議し、結論を提訴された会員に勧告する、(3) その他上記の目的達成のために必要と認められる活動をする、の3点です。幸い、今期は会員諸氏の活動に対し倫理的問題は報告されておりません。また、倫理綱領および倫理委員会規定は2005年度中に改正審議を終え、2006年9月に関西学院大学で開催された第24回年次大会の折に総会でご承認いただきました。

したがって、今期の倫理委員会の業務は倫理問題に関する啓発活動のみでした。大きく分けて2つの活動を行いました。その1つは研究および実践活動に係わる倫理問題に関する情報を収集し、随時会員に提供することです。2006年度は年次大会会場に設営された論文交換スペースに、「厚生労働省における動物実験等の実施に関する基本指針（案）」、文部科学省「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針（案）」などを置き、研究倫理に関する関係官庁からの規制について情報提供を行いました。また、本学会のブログ（<http://blog.j-aba.jp/>）にて、(i) 日本学術会議「科学者の行動規範について」、(ii) 日本学術会議会長談話、(iii) 文部科学省の科学技術・学術審議会内に設けられた研究活

動の不正行為に関する特別委員会の報告書「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」について、の3つの紹介を行いました。学会ウェブページのブログでの情報提供は、2007年度と2008年度も引き続き行い、(i) 利益相反に関する厚生労働省指針、(ii) 厚生労働省「臨床研究に関する倫理指針」改正という2つの情報を提供いたしました。なお、これらの情報はブログの検索欄に「倫理」という単語を入れて検索いただくと現在でも見ることができます。

今期はさらに、倫理問題に関して行動分析学に関連する他学会とともに研修会・講演会を共同で開催しました。具体的には、2007年度は立教大学で開催された第25回年次大会において、「行動分析学と獣医学の立場からみた動物実験における倫理問題」をテーマに研修会を開催しました。動物実験を行う行動分析学の立場（森山委員）、家畜・愛玩・展示動物の治療を行う獣医学の立場（非会員の桜井富士朗氏）、そして人の臨床研究に関わる看護・医療の視点（鎌倉委員）から話題提供があり、会場で動物実験の倫理に関するアンケートを実施しました（アンケート結果は、ニューズレター No.49（2007年冬号）に森山委員がまとめておりますので、未見の方はぜひご覧下さい。この研修会は、日本動物心理学会・日本動物行動学会・日本基礎心理学会会員にも無料で提供し、参加者には参加証明書を発行しました。2008年度は、逆に、他学会の倫理企画を本学会会員にも提供いただきました。具体的には、常磐大学で開催された日本動物心理学会第68回大会の特別講演「動物実験倫理指針の運用と課題」（講師は財団法人実験動物中央研究所の鍵山直子氏）に、本会会員のうち動物実験に従事している者の参加を無料とさせていただきました。

以上2つの企画はいずれも、動物実験という

実験的行動分析にとって重要な研究法に関する倫理問題を取り上げたものですが、ヒトを対象とした実験や臨床活動などにおいてもさまざまな倫理的問題が考えられます。2008年度はそう

したテーマで講演会を実施することも検討しましたが、諸般の事情で実施できませんでした。次期の倫理委員会へ期待したいと思います。

広報委員会 担当常任理事 望月 要

広報委員会の主な仕事は、(1) ニュースレターの刊行、(2) 学会ウェブサイトの管理と運営 (3) 行動分析学会メーリングリストの管理と運営、(4) 学会 blog の管理で、その他にウェブサイト内の「行動分析学が学べる大学・研究機関」の情報更新を担当しております。今期 (2006-2008年度) の委員は、望月要 (帝京大学) と井垣竹晴 (東京女学館大学) で、他にウェブサイト管理担当者として廣江美恵 (帝京大学大学院) の3人で業務を担当致しました。

今期の活動で特筆すべきものは、ニュースレターの電子出版を実現したことと、学会が運営するメーリングリスト beemail を設立したことです。ニュースレターの電子化は以前から検討されていた課題ですが、ようやく今期に実現することができました。現在、会員の皆様の希望に応じて、メールによる刊行通知、メールによる pdf ファイル本体の配信、印刷冊子体の送付、と3種類の付加的サービスを実施しておりますが、電子化の結果、印刷と発送の経費を大幅に削減することができ、日本行動分析学会の運営に貢献できたと考えております。また発送・印刷費用の制約が少なくなった分、編集の自由度

が大きくなったことも見逃せません。

メーリングリストの設立も長年の懸案事項でしたが、今期に beemail を設立して解決することができました。日本の行動分析学 ML としては、比較的早い時期に bml が設立され、日本行動分析学会の後援を受けて運用を続けてきましたが、基盤機関の改組、管理者の転出などにより安定運用が難しくなっていました。今期、学会のウェブサイトを置いている ISP で新たに beemail として運用を始めることができました。2009年2月20日の時点で参加者は133名と、やや少ないのが心配ですが、学会員も含め、行動分析学に関心を寄せる人々の情報交換の場として発展して行くことを期待しております。

「行動分析学が学べる大学・研究機関」の運営については、随時情報更新の促進を行ない、現時点で未完成ですが、今期中に、随時情報更新を受け付けるサイトの運用を開始したいと考えております。行動分析学の授業を御担当の先生方には、今後とも御協力をお願い致します。広報委員会の今期の活動を支えて下さった常任理事、理事、そして会員の皆様、ありがとうございました。

自主公開講座報告 「特別支援教育を推進する連携と協働に向けて、行動コンサルテーションから学ぶ」 岐阜大学大学院 平澤紀子

日本行動分析学会様のご後援をいただき、標記の講座を平成 20 年 12 月 6 日(土) 10:00-12:00 に、岐阜大学教育学部 B 101 教室で開催いたしました。

特別支援教育においては、発達障害のある児童生徒に対して効果的な支援を行うために、学校全体の取組や関係機関との連携や協働が課題となっています。そこで、本講座では、こうした関係者が連携協働した課題解決を促進するために、近年、大きな成果が報告されている行動コンサルテーションの考え方や方法論を学ぶことを目的として、行動分析学会会員の上越教育大学大学院学校教育研究科教授の加藤哲文先生からご講演をいただきました。

当日、特別支援学校や小中高등학교の教員および障害者施設の指導員、保護者、学生の総計 126 名が参加されました。加藤先生からは、学校コンサルテーションの背景や行動コンサルテーションの特徴を解説していただいた上で、研究室の取組を基に、行動コンサルテーションの実際や課題についてお話をいただきました。対象児にかかわる教員に対して、効果的な支援を発

見し、実行を促進するための間接的な手法について、関係の築き方、限られたアセスメント情報から、教員に有効な情報を提示するプロセス、教員の行動随伴性を踏まえた実行性を高める工夫、コンサルテーションの効果測定の方法など、特別支援教育コーディネーターとしての資質の向上につながる視点や方法を学ばせていただきました。講演後は、特別支援教育コーディネーターの教員から、教員同士のコンサルテーションのあり方、特別支援学校から高等学校へのアプローチ、連携や協働を支える組織的な仕組み、効果測定の方法などに関して、活発な質疑が行われました。

こうした講座がもてましたのも、日本行動分析学会からご後援をいただきましたおかげと感謝しております。岐阜大学教育学部特別支援教育センターでは、毎年、大学学部の公開講座において、行動分析学の最前線をお届けする企画を開催しています。今後とも、学会様ならびに会員の皆様のご協力をいただきたく、何卒宜しくお願いいたします。

日本在住学生会員の ABA/SQAB 参加に対する助成事業 国際・渉外委員会 杉山尚子

日本行動分析学会は、1983 年の創立以来、行動分析学の発展に寄与してきましたが、創立 20 周年を機に、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、ABA への参加を助成する事業を開始しました。さらに 2007 年度からは、事業を発展させ、SQAB への参加も助成対象に含めることに致しました。学生会員の奮っての応募を期待します。

応募資格

1. 2009 年 5 月に米国フェニックスで開催される ABA または SQAB に発表を申込んだ者。
2. 発表の種別は、口頭発表、ポスター発表、

シンポジウムのスピーカー、パネルディスカッションのスピーカー、のいずれかであること。また、口頭発表、ポスター発表では、第一発表者であること。ビジネス・ミーティング、ABA Expo、同窓会(reunion)、ワークショップのみの参加者は応募できない。

3. 2008 年 4 月 1 日に、日本行動分析学会の学生会員として登録されている者で、ABA/SQAB 参加に対して他の資金援助を受けていない者。ただし、SABA が募集する学生発表者の大会参加費免除への同時応募は認められる。

4. 申請時に日本国内に居住していること。
5. 過去にこの事業による助成を受けていない者。

提出書類

1. 規定の応募用紙に必要事項を書き込んだもの。応募用紙は、ニューズレター、ホームページあるいは学会事務局からも入手できる。
2. ABA/SQAB に提出した発表申込書を印刷したもの
3. ABA/SQAB が発行する発表受理書を印刷したもの

助成額

応募者の中から、抽選により2名に対し、1名につき75,000円を支給する。ただし、受給後、ABA/SQABに参加を取りやめた者は返金しなければならない。この場合は、再抽選を行なう。応募締切

2009年3月31日消印有効。締切後、公開抽選（日時はブログでお知らせします）を行い、結果を応募者に通知する。

提出先

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部心理学研究室気付
日本行動分析学会事務局
E-mail:j-aba.office@j-aba.jp
<http://www.j-aba.jp>

理事選挙報告

選挙管理委員長 浅野俊夫

日本行動分析学会の次期役員がままりました。新理事長には藤健一立命館大学教授が再選されました。

新役員一覧 氏名および所属（五十音順） （理事）

青山 謙二郎	（同志社大学）
浅野 俊夫	（愛知大学）
井澤 信三	（兵庫教育大学）
伊藤 正人	（大阪市立大学）
井上 雅彦	（鳥取大学）
大河内 浩人	（大阪教育大学）
奥田 健次	（桜花学園大学）
坂上 貴之	（慶應義塾大学）
島宗 理	（法政大学）
杉山 尚子	（山脇学園短期大学）

園山 繁樹	（筑波大学）
中島 定彦	（関西学院大学）
中野 良顯	（教育臨床研究機構）
野呂 文行	（筑波大学）
藤 健一（理事長）	（立命館大学）
松見 淳子	（関西学院大学）
眞邊 一近	（日本大学）
武藤 崇	（立命館大学）
望月 昭	（立命館大学）
森山 哲美	（常磐大学）

（監事）

清水 直治	（東洋大学）
山岸 直基	（流通経済大学）

自著を語る 『インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす』
青木愛弓

オウムをペットショップで買った客は、しばらくするとペットショップに引き取って欲しいと買ったオウムを持ち込んでくる。店主は、引き取ってまた店に並べる。また、別の客がそのオウムを買う。しばらくするとこのオウムは返品される…。オウムは、一羽仕入れると何度も売られるお店にとってはオイシイ商品である。

前号のニューズレターでは中島定彦先生よりこれ以上はないという書評を頂戴き、まだ余韻に浸っております。また拙書「インコのしつけ教室」の話題で恐縮ですが、お付き合い下さいませ。タイトルをご覧になった方は、インコにしつけ？と疑問に思った方もいらっしゃるかもしれませんが。オウムやインコは、綺麗な姿と物まねを楽しむペットとして知られていますが、3歩あるいたら忘れるどころかなかなか学習能力が高いため、呼び鳴きや噛み癖といった問題行動で飼い主さんが手を焼くことも少なくありません。特に大音響の鳴き声と破壊力のある嘴を持つ大型のインコやオウムの場合（耳元でトランペットを鳴らし、ニッパーで指を切られる感じ）には、もてあましてしまう飼い主さんも多く上記のような小話もあながち作り話ではないのかもしれませんが。小さなインコの場合もサイズが小さい分被害も若干小さくなりますが、問題行動には手を焼いているようです。

私は社会人になって大学院に入ったのですが、そこでインコと行動分析学に出会いました。そこで実験を通して、インコは、置かれた環境に対して正しく反応しているんだということに気がついたときに、私は今までよく見えなかった視界が、よく見える眼鏡をかけてはっきりと見えたように思えました。このような経験をしてインコという動物の面白さと、行動分析学の深みにはまっていったわけです。そして、この本に繋がっていくのですが、実は、私は行動分析学に18歳の時に出会っているのですが、そのときにはその面白さに全く気がつくことができませんでした。大学院で再び出会ったとき、これ

を知っていたら色々なことがもっとうまくいったのに！と非常に強く感じたので、行動分析学と動物との暮らしを結びつけるわかりやすい本を書きたいなという思いに繋がっていきます。

この本は、インコのしつけ教室というタイトルでありながら、困ったインコをどうにかする方法が書かれた本ではありません。表紙には、The parrot is always right. という言葉をデザインに入れてもらい、最終章には、「インコはいつでも正しい」という言葉が見出しになっていますが、この言葉が示すとおり、インコは、私たちが提供した環境に対していつでも正しい反応を返してくれます。インコがいつもインコらしく楽しく暮らし、良い子でいられるよう適切にサポートしてあげられるのは、一番長く鳥と一緒にいる飼い主さんです。飼い主さんがお仕着せのしつけ方法に振り回されることなく、行動分析学の考えをもとに自分らしい鳥とのつきあい方を考えれば、鳥に幸せをもたらし、そして鳥の可愛いしぐさに癒される。そんな幸せの相互作用が生じるのではないかと思います。この本が、その小さなきっかけとなれば幸いです。

インコのしつけ教室 応用行動分析学でインコと仲良く暮らす 青木愛弓著 誠文堂新光社 ¥1680円

(編集部注)「もしスペースありましたら」、私(望月)の「所のコザクラちゃんのお写真をお名前と共に掲載してください。読者の方達、とても喜ぶと思います！」という青木氏からの御要望がありましたので、我が家のコザクラインコを御紹介します。家内には頭をすり寄せて甘え、私には猛然と噛み付いて来る14歳のHarpoです。



自著を語る『臨床行動分析のABC』

立命館大学 武藤 崇

みんな、見てくれ。これが今度のターゲットだ。

「臨床行動分析のABC」...「行動の機能が『わかる』と臨床が『かわる』」... 日本評論社。おい、ルパン。また本かよ。せっかく日本に帰ってきたと思ったら、本屋でも始める気か！ この前も、金閣寺の近くまで行って本だけ盗んで返ってくるわ、あげくにフルハタとかいう新手の刑事に目を付けられるわ...^{註1)} お前さん、カリオストロ^{註2)}から帰ってきてからというもの、少し呆けちまったんじゃないのか？

そうよ！ 私たち、ボランティアでやっているわけじゃないだから。まったく、もう！ 失礼しちゃう！

まあ、そう言わないでよ、フジコちゃ～ん...

拙者も気が進まぬ。

何だよ、ゴエモンまで。みんな、つれないんだから... まあ、最近、俺も思うところがあるな... 泥棒にもできる社会貢献っていうのもあるんじゃないかと思って... 言ってみれば「新たな価値の創出」ってヤツさ。まだ価値が定まっていないものを俺たちがいただくことによって「価値あるもの」にするっていう寸法だ。それに宣伝効果も絶大！

おいおい、ルパン。俺たちはいつから義賊になったんだ？... それはそうと、ホントにその本に価値があるのかあ？

まあな。「リアリティこそ、セラピスト/クライアントの最良の友」っていうフレーズにグッと来たね。

フィクションのお前がそんなフレーズにグッと来て、どうするんだあ...まったく。

そんなことはないぜ、ジゲン。「フィクションであるかないか」と「リアリティがあるかないか」は直接関係しないだろ？ 要は、そのフィクションがファンクションするかどうかだ。もっと言うと、「fiction」と「function」の違いは、「i」と「un」。つまり、問題なのは、「私(i)」という閉じた空間から「複数のあなた(you × n)」という開かれた空間へと読者を引っ張り出させるかどうかなんだ。

だが、お主の言っていることは、所詮「盗人、猛々しい」に過ぎぬ。

言うよね～ 厳しいんだから、ゴエ...

御用だ、お前たち！ 神妙にお縄を頂戴しろ！

あら、とつつあん。お早いお着きで。これで役者が揃ったな。でもな、ここで捕まるわけにはいかねえんだ。またな、とつつあん。ばっはーい！^{註3)}

註1) 「立命館大学心理学研究室・書籍大量盗難事件(京都市北区等持院北町)」のこと(行動分析学会ニューズレター2008年春号(No. 50)を参照)。

註2) 映画「ルパン三世：カリオストロの城」(1979年/監督=宮崎 駿)に登場するカリオストロ公国という架空の国名(北欧にあるリヒテンシュタイン公国がモデル)。ちなみに、(本訳書の)原著はスウェーデンの行動分析家によってスウェーデン語で書かれ、本訳書は2008年に公刊された英語版を訳出。

註3) このお話も、もちろんフィクションです。

【当該書籍情報】 「臨床行動分析のABC」
ユーナス・ランメロ&ニコラス・トールネケ
(著) 松見淳子(監修) 武藤 崇・米山直樹
(監訳) 日本評論社 定価 3300 円(税別)
ISBN 978-4-535-98300-7

(編集部注) 執筆者の武藤氏からは、発言者毎に書体を変えた、大変に凝った原稿を頂戴したのですが、編集部の環境の関係で書体の違いを表現できませんでした。申し訳ございません。

『行動分析学が学べる日本の大学・研究機関』情報提供のお願い 広報委員会 望月 要

日本行動分析学会ウェブサイト掲載の「行動分析学が学べる日本の大学・研究機関」の情報更新をお願いしております。現在情報を御提供戴いている方々には、先日 E-mail にて情報更新のお願いを致しましたが、E-mail アドレスが変っている方もいらっしゃるようです。行動分析学の視点・枠組で授業をされている教員の皆様、是非情報を御提供下さい。1科目だけでも、科目名

に「行動分析学」という語が含まれていなくても構いません。行動分析学の研究者が、これだけ全国の大学・研究機関で活躍している、ということアピールできるだけでも意味があると思います。また「うちの大学の、あの講義、あの科目が載っていない!」という情報も歓迎致します。bacjp@j-aba.jp 宛てお送り下さい。

編集後記 ニューズレター編集部

今期最後のNLをお届けします。予告だけで、結局実現しなかった連載企画もあって、会員の皆様の御期待に、どこまで応えられたか不安ですが、3年間、御愛読ありがとうございました。

春からは新しい編集体制でお届け致します。今後も『日本行動分析学会ニューズレター』を宜しく願い申し上げます。

ニューズレター編集部よりお願い

- ニューズレターには個人情報に記載されている場合があります。御覧になった後、処分の際には十分に御留意下さいますようお願い致します。
- さまざまな内容の記事を随時募集しています。詳しくは望月までメールでお問い合わせ下さい。尚、記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析

学会ウェブサイトで開催いたします。

192-0395 八王子市 大塚 359
帝京大学文学部心理学科内
日本行動分析学会ニューズレター
編集部 望月 要
E-mail: moc@main.teikyo-u.ac.jp

